



「こんにちは 市長です」

1月15日号

昨年暮れ、K氏が昭和15～16年の月刊誌『同盟グラフ』（同盟通信社）を持ってきてくれた。写真がたくさん載っていて、それを記事で解説する。私が生まれた年の月刊誌だ。真珠湾攻撃の半年前、昭和16年6月号を開くと、1ページ目は「靖国神社にて神への凱旋」、新祭神（さいじん）（その年？戦死された方）1万4976柱に陸軍部隊が参拝する写真。昭和15年9月27日の日独伊三国同盟成立や大政（たいせい）翼賛会（よくさんかい）が「世界史の変革期に直面せる新日本の発足」と、11万人が祝賀集会の記事など、どれも戦争一色である。硬いものばかりではない。大相撲春場所総決算と称して照国や双葉山の取り組みが分解写真で解説されている。ほっとする。一部70銭である。物心ついた時のお小遣いは1円とか2円だったのだろうか、もらった記憶はない。近所にお店があったかどうか。なかったのかもしれない。戦争前も後もみんな貧しかった。中刷り広告には「割増金附（きんづけ）支那事変 貯蓄債券 報国債券」と、大蔵省が雑誌に国債の大募集をしている。戦争には巨額のお金が必要である。ミッドウェー海戦を境に劣勢に転じ、砲弾や食料、医薬品の補給は断られた。兵士の多くは密林を逃げ惑い、そして倒れていった。開戦1年後にはお金がなくなっていたのでは？

私が生まれた時、父は戦場にいた。ニューギニアまで追われて捕虜になった。東武太田駅で父に初めて会ったのは5歳。駆け寄って抱きしめるというドラマのシーンがあるが、そんな感動的な出会いではなかった。マラリアでむくんだ顔を見て目を伏せた。戦後、大光院や太田駅の前で物乞いしている傷痍（しょうい）軍人がいた。ハーモニカで「故郷の空」など吹いていた。涙がこぼれた

防衛費を増やすより肝心なのは中国との外交。増税より一点集中の中国外交が必要ではないか。（12/26 記）